

平成24年度「卒業研究」実践報告

「卒業研究」委員会

本弓康之 深澤孝之 松井一夫 丹羽美由紀
建元喜寿 石田光枝 金城幸廣 後藤卷子
石井克佳 阪本康之 吉備 豊 工藤泰三
塗田佳枝 初谷和行 熊倉悠貴

今年度卒業研究を行う平成22年度入学生は本校で第二期と称している教育課程最後の学年となる。そのため次の教育課程を見据えながら、特にテーマ設定における指導の方法を大きく変更した。生徒の興味関心に根ざした課題発見、課題解決学習を進めるための試みである。今年度の卒業研究の実践は23年度からスタートした本校第三期の新しい教育課程を進める上で重要な示唆を与えてくれるものであった。

キーワード：興味・関心 課題発見力 多様化 個性化

1. はじめに

今年度の卒業研究は本校にとって一つの大きな挑戦であった。今年度の授業の進め方については強い反発もあった。卒業研究の取り扱いをめぐる校内がもめたことはこれまでになかったといつてよい。総合学科開設当時原則履修科目としての課題研究から現在にいたるまで、卒業研究（課題研究も含めて）は成果も上がっているし生徒の進学にも大いに良い影響を与え、本校では「学びの集大成」という呼び方で総合学科教育の完成形であると大きくアピールしてきた。そのような科目についてなぜ「挑戦」が必要だったのか・・・。

これまで本校は総合学科を開設してから教育課程を2回大きく改編した。それぞれ第一期（開設～平成14年度入学生）、第二期（平成15年度入学生～平成22年度入学生）、第三期（平成23年度入学生～）とよんでいる。現在の3年生は「第二期」最後の学年である。第二期の教育課程編成の中心的課題は「大学進学できる総合学科」「大学で何を学ぶか学ぶ進学校」であった。それまでオープンだった科目選択については系列による縛りを設けた。系列選択制の科目選択によって一定程度の系統性の学びを保証し、その学びを発展させたいという動機を持って大学へ進学する生徒を育てることが目標となった。卒業研究については特にAO入試や推薦入試などの際に、進学する分野に対する自らのやる気と課題解決能力を大

学に示す道具としてとらえ、自分の進路に直接関連するテーマ（自分の『所属』する系列に関連するテーマ）へ誘導してきた。このような指導は一定の成果をあげた。総合学科にふさわしくない評価軸での表現となるが、第二期最初の卒業生においては、筑波大学に5名、その他国公立大学に6名の合格者を出すことができた。これらの結果は卒業研究の成果を直接反映したものであった。一方、卒業研究の中でいくつかの極めて重要な課題が出現してきた。最も大きな課題がテーマ設定で多くの生徒がつまづくことである。テーマ設定は研究活動において最大の課題ではあるが、テーマ設定に悩む生徒、途中でテーマを変更する生徒が年々多く見られるようになり、その悩みの質が問題なのである。このような生徒に共通していえることは、持っている問題意識が壮大で薄いということである。環境問題に興味があり、地球温暖化について研究したいとか、災害現場など過酷な場所で自由に動き回ることのできるロボットをつくりたいとか、少子化に歯止めをかける方法を提案したいとかその純粋な心意気は理解できるのであるが、では何をどうやって解決していこうかとなると、とたんに何もできなくなってしまうのである。加えていわゆるステレオタイプといわれる考え方の生徒も多いのが特徴である。そもそも自分で考えた問題意識ではなく、テレビで聞いたとか多くの人がそう言っているからとか、授業で先生が言っていた

とか、そのような思い入れのない問題意識から課題を設定しようとするのである。このような自分の心の中からわきあがる興味関心を持たない生徒の現状を目の当たりにすると、総合学科だからこそできる学びが十分でないと痛感させられるのである。またこのような生徒に限って、自分の思いが向かない分野や考え方に触れることを極端に嫌うという傾向にある。卒業研究の課題設定にあたって担当の教員が、「こういう考え方もあるよ」とか「こんなことも考えてみては」などとアドバイスしてみても自分の思いと違ふとか、興味がないとかいう生徒もみられる。ではなぜこのことが重要な課題なのか。それは臨教審以降の高校教育改革の本質に関わる問題だからである。臨教審以降「多様化と個性化」が教育改革のスローガンとなった。生徒が興味関心に応じた多様な学びを自ら選択し、そしてその多様な学びが個性化を実現することにつながるという考え方は総合学科教育の理念でもある。その理念を支える最大のものが「生徒の興味関心」である。ただ、先に紹介したように卒業研究のテーマ設定の過程を見るに、生徒達は自分の興味関心というものを持っていない、もしくはそれに気づいていないのではないかと強く感じるようになった。興味関心の希薄さは直接的に総合学科教育の希薄化を意味する。今年度の挑戦は生徒の中にある(と思いたい)興味関心を探すこと、そして生徒自身がその興味関心に基づいて自分なりの課題を設定し、自分で解決し、学びの楽しさを感じることでできるのか探ることであった。第三期の本校の中心的課題は「多様化と個性化」のもとになる興味関心、つまり生徒自身の中に、きれいとか欲しいとかやってみたくとか、いいことだとか悪いことだとかのいろいろな価値を身につけさせ、その自分の価値を社会や他人と結びつけながら将来の進路・生き方を考えさせることにある。本年度の3年生は第二期にあたるわけだが、移行期ということで今年度の卒業研究は新しい教育課程理念の実現可能性を探る一つの役割を担っていたのである。

2. 今年度の取り組み

今年度の卒業研究では、旧教育課程から新教育課程への移行期ということで、旧教育課程では毎週2時間で行っていた卒業研究を金曜日1時間・隔週土曜日3時間で行うこととなった。毎週の授業時間内での生徒の活動が毎週1時間となり、その授業時間内では調査研究がほとんどできないことから、今回の卒業研究では、生徒個人の授業時間外(放課後や自宅)での研究活動が主となった。

また、今年度の取り組みで特徴的なことは、卒業研究のテーマ設定を「自分が楽しいこと・やってみたくこと・調べてみたいことをやる」ということとし、生徒自身のやる気を尊重し、その結果として生徒自身のオリジナリティあふれる研究を期待したことである。

3. 評価の観点と方法

評価は、以下のように項目ごとに基準を設けその基準にしたがって生徒の評価を行った。この評価基準は、1学期の最初の授業で生徒に示した。

○1学期

- ① 活動の記録(4・5・6月分) 20点
- ② 活動状況(4・5・6月分) 40点
- ③ レポート提出①(6月29日〆切) 40点

○2学期

- ① 活動の記録(9月分) 10点
- ② 活動状況(7・8・9月分) 10点
- ③ 中間発表会(レジュメ・PP・発表内容) 20点 (担当2人で10点ずつ評価)
- ④ レポート提出②(9月1日〆切) 10点
- ⑤ レポート提出③(9月29日〆切) 20点
- ⑥ グループ別発表会(レジュメ・PP・発表内容) 20点 (担当2人で10点ずつ評価)
- ⑦ 10月・11月の活動 10点

○3学期

- 12月・1月の活動 100点

○年間評定

- 1学期(4・5・6月) 35%
- 2学期(7・8・9月+10・11月) 50%
- 3学期(12・1月) 15%

4. 特徴ある研究

卒業研究担当者に次の3つの視点をふまえて、それぞれの担当生徒の研究を評価し、成果をあげたものについて研究の概要と評価のポイントをまとめてもらった。

(資料1参照)

- ①テーマがユニークなもの
 - ②外部の機関等と積極的な関わりを持って研究を進めたもの
 - ③地道な活動を積み重ねて研究をまとめたもの
- 今年度の卒業研究を進める上で最も重視したのは「生徒の興味関心の上に立つ学び」をどう実践するかである。

各担当者の報告は今年度の実践が一定程度の成果をあげたことを示唆するものである。生徒全員が十分な成果をあげたのかといえばそうではない。卒業研究の会議でも全く研究を進めようとしないう生徒がいるという報告もあがってきていた。

5. 卒業研究授業アンケート

卒業研究の授業について、生徒を対象として毎年同じ内容でアンケートを行っている。質問は次の13項目（13項目目は本年度のみ実施）、「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4件法での回答を求めた。

- 1 高校での学習や体験にもとづいた主題（テーマ）設定ができたか
- 2 満足のいく（適切な）テーマを設定することができたか
- 3 計画的に研究活動をおこなうことができたか
- 4 卒業研究の時間を有効活用したか
- 5 放課後や休日を利用して研究活動をおこなったか
- 6 校外の場所へ出かけたり校外の人に対して聞き取り活動をおこなったか
- 7 指導担当の先生のアドバイスを活用したか
- 8 論文作成のために読んだ参考図書や先行文献の冊数を答えて下さい。
- 9 人前で自分の考えを発表する力が身についたか
- 10 論文作成をととして論理的な文章力が身についたか
- 11 自分の設定した課題の解明に向けて主体的に努力したか
- 12 満足のいく卒業研究論文が作成できたか
- 13 今年度の卒業研究のテーマは履修している系列等の授業に関係なく決めることができたが、このようなテーマの選択方法について良かったと思いますか。

また次の項目について記述式による回答を求めた。

- 1 活動に対する自己評価
- 2 卒業研究において苦労したこと
- 3 卒業研究をやってみて感じる自分の変化
- 4 授業運営等に対する意見
- 5 後輩へのアドバイス

アンケートの結果の一部を資料2に示す。アンケートの集計の結果、昨年度と比較して大きく違いがでた項目は、「2 満足のいく（適切な）テーマを設定することができたか」および「3 計画的に研究活動をおこなうことができたか」に対する回答である。「そう思う」「ややそう思う」の肯定的回答が、2の項目では72%（昨年）に対して、今年度は83%、3の項目では35%（昨年）に対し

て、今年度は49%であった。今年度は自分のやってみたことをテーマ設定するという指導を行った。生徒自身も選択科目で何を履修しているとか、進路に関係するとかしないとかそういったことにとらわれずテーマの設定できたことが、計画的な活動を促すことができたのではないかと考えられる。その他アンケートについての詳しい分析などは別稿にて報告したい。

6. おわりに

今年度の挑戦で最も大きな成果だったことは、ほとんどの生徒が自分の中に興味関心または興味関心の芽を持っていることが確認されたことにある。つまり総合学科教育の理念実現のために最も必要とされる要素をほとんどの生徒が持っていることがわかったのである。生徒が設定したテーマは実に多様である。第一期、第二期を通して、系列に関係の薄いテーマは5系（第一期は4つの類系、第二期は4つの系列があったため、それらの分野に関わらない内容のテーマは5系といわれていた）といわれ、学校としては好ましくないテーマ設定群として取り扱われていた。1～4系は専門教科と関連しているため主に専門教科の教員が担当することになる。一方、5系といわれるテーマは主に普通教科の教員が担当することが多く、教員の中からもこの指導体制に疑問を呈する意見も出されていた。5系のテーマを設定する生徒はそもそも学校のシステムである系列や類の学びに合わないか、どうしても興味のわかない生徒であることが多かったため、学びに対する意欲の低い生徒であった。しかし、今年度は系列や進路に関係しない自由なテーマ設定としたため、これまでの指導体制が意味をなさなくなり、担当者も機械的に割り振ることになった。ちなみに筆者は工業科の教員である。昨年度までの体制であれば、ロボットや電子回路、機械などに関連するテーマを担当していたのだが、今年度は「兄弟喧嘩の上手な仲裁方法」から「ペン回し」、「ハムスターの学習能力」など幅の広いテーマを担当した。私の担当した生徒達の研究は特に彼らにとって進学に有利に働くというような対価のともなうものではなかったが、いきいきと楽しく最後まで研究を続けることができたようである。担当した私自身もこの卒業研究を通して新しい可能性を感じることができた。

一方で研究の中身について深みがないという指摘もある。また、今回のテーマ設定のような発散的思考について3年生ではなく、もう少し早い段階で行わせるのが適当であるとも考えることもできる。一部難関大学を除けば大学進学は高校生を学習に導く動機付けとはならなくな

った。この現状に目を向ければ生徒の主体的な学びを促すために、生徒自身の中に興味関心をどのように生み出すか、引き出すかが大きな課題であることがわかる。生徒自身の中にわきあがる興味関心ほど学びの動機付けとなるものはない。まず自分の興味関心に気づかせ、そこから学ぶことに対する意欲を高めさせていくことができれば、高校での学習は充実したものとなることは疑いようがない。このような役割を科目群、総合的学習、産社、キャリアデザインなどを核として、加えて一般教科・科目も含めて果たすことができれば、卒業研究はもう一つ先のレベルに達することができよう。充実した学習活動の先にある卒業研究とでもいえようか。先に書いた卒業研究の新しい可能性とは、生徒が自らの興味関心に基づき高校での学びあるいはそれまでの生活全てを有機的に結びつける力を獲得し、自分の中に多くのストックを持って卒業研究の機会を迎え、自分の中に一つの価値観を獲得することである。この価値観はある分野のある小さな事柄に対する自分の意見であるかもしれない。しかし一つであっても自分の考えに自信を持ちはっきり表現することができるようになれば、自分に対する自信とさらに新しい価値を創造する意欲を獲得することができるようになるのではないだろうか。これは総合学科の基本的理念して重要な要素でもあり、第三期で本校が目指したい卒業研究の姿でもある。

【参考文献】

- 「卒業研究」委員会（2011）. 平成23年度「卒業研究」実践報告. 「筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要」第49集. p37~p51. 筑波大学附属坂戸高等学校.
- 筑波大学附属坂戸高等学校編（2012）. 「新時代の総合学科」. 学事出版.

「コンビニ食品に含まれる食品添加物とその効果」

A組 山盛 明夏音

研究概要

コンビニ弁当では、それぞれに商品表示ラベルに「保存料・合成着色料は使用しておりません」という旨のことが記載されてるが、保存のための添加物や、着色の効果がある添加物は数多く用いられていた。これは、「保存料」「合成着色料」といった名称の食品添加物を使用していないということであって、そういった用途で用いられる添加物の総称・種類を指しているのではないこと。情報として間違いや虚偽があるわけではないが、消費者に誤ったイメージを与えるものであり、植え付ける要因の一つであると考えられること。そのために必要であると思う対策を考えている。ひとつはメーカー側がそういった表示にもっと慎重になること。もうひとつは消費者側が正しい知識を身につけること。また、添加物や加工品、その危険性について誤った情報や、間違った知識で食生活を築いてしまうのは危険なことで、消費者一人ひとりが正しい知識を身につける必要があることを論証している。

担当者から

卒業研究の作業が始まってから、3日に一度はコンビニ弁当を購入し昼食弁当として各弁当のラベル表示をデジカメに写したり、表示の表現を比較検討していた。コンビニも、セブンイレブン・ローソン・ミニストップ・ヤマザキディーリー・ファミリーマート・セーブオンなどの各店舗の比較検証も行っている。さらには、各コンビニに販売している鳥の唐揚げを購入し、家庭で唐揚げを調理し、常温で保存した場合の腐食実験も行っており、高校生としてはユニークで積極的な研究であった。

担当：松井 一夫

「普段の自分が絶対にしないであろうことをする」

D組 小林 力

研究概要

本研究は、普段の自分がしないことをすることによって、自分の視野を広げ自分の殻に閉じこもりがちな自分自身の成長を期待するという研究である。研究の方法として、①どこか知らないところへ行く、②知らない人に話しかける、③面白いものを見つける、④1万歩以上歩く、⑤気が付いたことや自分の中での変化を記録していくというものである。この研究の結果、自分の知らないことを知るということがいかに楽しいことであるかということを経験し、家に閉じこもりがちな性格から一転して、家の外で新しいことを知ることの楽しさを求めるように本生徒の心が変化したようである。

担当者から

さまざまな場所に行き、知らない人と話をし、面白そうなものを探すという怪しげなテーマであるが、内気で引きこもりがちであると本人が自覚している本生徒が、勇気をもって家の外に飛び出すということは、本人にとって相当なストレスであったろうと考えられる。しかし、回を重ねることにそのストレスが本人の楽しみに変わり、また、本生徒の報告を聞く私や卒業研究グループの生徒がその報告を楽しみに聞くことで本人の自信へとつながってきたと思う。本研究は、何かを探求したものではないけれども、生徒本人の考え方を自分自身で積極的に未来志向の人間に変えていったというところにこの研究の意義があると思う。

担当：本弓 康之

「現代のプリクラにおける比較と需要」

B組 大嶋 彩乃

研究概要

様々な機種が発売され女子高校生にも人気の高い通称「プリクラ」について、機種ごとの機能や性能を比較しつつ、企業の機種開発の方向が需要者である自分たち女子高校生の求めるものと一致しているのかという関心を持って研究に取り組んだ。フリー株式会社の発売する機種に限定し、目の大きさと顔のバランス、明るさ、輪郭の変化、髪のかやや質感、の4つの項目と、特に特徴的な点という5項目について全8機種で特徴の比較を行った。また、校内の61名に対してアンケート調査を実施し、よく利用する機種や利用する機種を選ぶ理由、プリクラに求めるものなどを調べた。結果として「企業では従来になかった新しい機能を開発していて、プリクラがものすごいスピードで進化し、新しくなっている。だが、それが必ずしも評判がよいとは言えない。技術が上がり、より一層盛れるようになっている反面、新しい技術が全て受け入れられているわけではないのである。」とまとめている。

担当者から

自分にとって身近な存在であるプリクラに対して、日頃感じている「あれ？」という素朴な思いをテーマに設定し研究を進めた。論文の体裁や機種比較における評価の仕方、アンケートの分析などは改善すべき点が多々あるが、それよりも自分の中からわきあがる興味関心に従って熱心に一つのテーマと向き合った点を大いに評価したい。主体的な学びに最も必要な姿勢を見ることができる。

担当：深澤 孝之

「イトミミズの土壌の肥料効果によるイネの発芽生育実験」

A組 佐藤 彩香

研究概要

ミミズは古くから「大地の腸・生態系の技術者」と称され、ダーウィンも「地球上もっとも優れた Earth Worms」と称賛している。しかしながら生態はまだあまり知られていない。この研究では、ミミズの中でも水生であるイトミミズの生育や習性を観察し、稲への除草効果や土壌への影響・生育を調べている。農業に適している土づくりのためには、土壌動物や微生物は必要不可欠な存在であるため、イトミミズが除草効果を出せば、除草剤を減らすことができ、また排泄物の栄養価が高ければ、肥料も減らすことができると考えたからだ。実験では「イトミミズとその糞入りの土」と「庭の土」と「バーミキュライト」の3種において、土の様子やイネの発芽実験・除草実験、イネの成長観察を比較した。それらの考察からイトミミズの作る土壌は栄養のある成分があると思われる。

担当者から

佐藤さんは卒業研究を始める以前からコツコツと自宅で実験を行っていた。このことを卒業研究の担当になったときに聞き、とても驚き感心した。データ（数値や写真）もこまめにとってあり、9月になっても観察実験を続けていたので、卒業研究としてこれらをまとめ、努力した成果を示すことができた。11月には筑波大学においてポスターセッションを行い、色々助言もいただいた。そしていてねいにまとめた結果が出来上がったが、卒研担当者がもっと適切な指示や助言を与えることができれば、適格な数値で検証することができ、科学的にも精密さが増したのではないかなと思う。

担当：丹羽 美由紀

『現代パンク』の提案

B組 早川 智裕

研究概要

パンクロックが好きだが、周囲で聴いている人は少ない。なぜ社会現象にもなったパンクが現代では流行らないのか、また今の若者に聴かせるにはどんなパンクが良いのかという疑問からスタートした研究である。まずロックミュージックのサブジャンルとしてのパンクの歴史を文献等でまとめ、パンクの理念を表すキーワードとして「シンプル・難易度が低い・反発・革命」を導き出した。次に本校生を対象にパンクに対する意識や好きな音楽等のアンケート調査を行い、若者は「歌詞・雰囲気」がよく、「メディア使用」の多さから「印象」に残りやすい音楽を求めており、パンクが嫌われるのは「騒がしい、歌詞、下品、暴力的、下手」という点にあるという結果を得た。ここから現代パンクに必要な要件として、「シンプル・歌詞・革命・雰囲気・難易度が低い」との項目を設定し、「自らに反発する自虐パンク」であるオリジナル曲「僕の愛」を作曲して多重録音によりCDにした。

担当者から

パンクへの愛が詰まった研究である。初めてのアンケート調査や文献調査をまとめるのに苦労したが、好きなことをテーマにしたからこそ乗り越えられたのではないかと。オリジナル曲をゼミ内で披露した際は、作曲のねらい・聴き所も含めて発表し、好評価を得た。作曲のねらい等をレポートに入れられなかった、作曲した曲が本当に「現代パンク」たり得たかという検証ができなかった等の課題はある。しかしパンクへの余りある思いを、現状の分析から解決策の提示まで研究として形にした点を大いに評価したい。

担当：塗田 佳枝

「私が嫌いなブロッコリーを美味しく食べられるレシピを考える」

B組 権上 麗奈

研究概要

嫌いなブロッコリーを美味しく食べるためのレシピ開発を、様々な料理（これまでブロッコリーが利用されることの少ないものも含め）に試してみることで行った。野菜が嫌いな原因は風味や味だけではなく、食感も関係しているものもあり、つぶしたりペースト状にするなどの工夫も行った。嫌いなブロッコリーを食べようとしたのは、ブロッコリーには様々な栄養素が含まれているため、健康に良いためである。最終的に、6個のレシピを完成させた。

また、学年全体で、野菜嫌いについてアンケートを行い、嫌いな人の多い野菜の特徴についてもまとめた。

担当者から

熱心に試作を繰り返し、友達にも試食をしてもらい意見をもらいながら、レシピを熱心に完成させていた様子は、しっかりと活動をともなったものでよかったと思います。また、調理方法による栄養素の低下を防ぐために、調理法についても配慮しながらすすめていったところも良かったと思います。はじめは、自分の“苦手”から始まっていますが、野菜が苦手な人はたくさんいるでしょう。ですから、権上さんのレシピが、お友達にとっても救いになるかもしれません。嫌いな野菜アンケートがまとめただけで終わったのは残念ですが、これからほかの野菜にもチャレンジしてみてください。

あと、せっかく筑坂だったので、自分で育てた野菜（あるいは、友達が育てた野菜）でレシピ開発などもできれば、なおよかったと思います。

担当：建元 喜寿

「高校生を対象にした一日看護体験の意義」

C組 吉田 和奏

研究概要

本研究は、一日看護体験をする前後で看護師になりたいと思う気持ちに変化があるのか、自分の体験からこのような気持ちの変化は、体験をした多くの高校生が感じていると考え、テーマを設定した。研究の方法は、文献調査とアンケート調査である。アンケートは一日看護体験をした高校生と、看護の専門学校に在学中の看護学生を対象にして行った。アンケートの結果から、高校生は一日看護体験に参加して将来看護師に強くなりたいと思った方が多数であった。看護学生に実施したアンケートでは、看護医療系を志望した時期と、強く志望した時期を答えて頂いた。その結果、最初に志望した時期で最も多かったのは高校2年生、強く志望した時期で最も多かったのは高校3年生であった。このことから、医療看護系を志望する高校生の時期に、一日でも看護体験を実施することには意義があると考えた。

担当者から

高校生の時期に看護体験をすることの意義を知るためには、看護の専門学校に在学している看護学生にアンケートが必要と考えた。そのために、自ら何校かの専門学校にコンタクトを取り情報収集を行う姿があった。更に、この一日体験を実施している病院側に看護体験についての意見も聞きたいと病院にもコンタクトを取り情報を得ようとする姿もあった。しかし、病院からは意見を聞くことが出来ず残念だったが、外部に発信しどんどん前に進む姿がよく見られた研究であった。

担当：石田 光枝

「人に本をおすすめする冊子を作る 『今、読んでもらいたい本100〜』」

C組 福川 正義

研究概要

研究目的は、自分が読んだ本の内容を忘れないようにするとともに、これから本を読む人に対していわゆるレビューとして紹介することである。研究方法は、かつて読んだ本の中で、人に勧めたい本を選定し、その本の面白さや印象に残ったポイントを記録する。1冊につきA4版1枚のレビューを作成する。レビューの内容は、本の表紙・紹介・おすすめポイントなどである。ある程度の冊数分を書きためたら冊子にまとめ、図書館や市役所に置かせてもらう。冊子を読んでもくれた人たちから意見を聞く。自分が読んで面白かった本だけでなく、並行して様々な人たちの声を聞いた中から選んだ本についても読書し、レビューを作成する。

担当者から

福川君は小さい頃から複数の公立図書館に通い、司書の方と顔なじみであるばかりか、地元では貸出券無しで本を借りることができるほど大の読書家だそう。彼は司書との会話の中で最近中高生が本をあまり読まないことを知った。弟に聞くと、どんな本が面白いのかわからないから読書を諦めていると言う。弟思いの彼は、「ならば私がおすすめの本をまとめた冊子を作ってみよう」と閃き、卒業研究で本のレビュー作りに取りかかった。近年、インターネットが普及し、生徒はじつくりと本を読むことが少なくなったと言われる中で、私の固定観念を覆すような研究だったと思う。残念ながらレビューは100冊に少し届かなかったが、「将来このようなレビューなどの文を書くときの参考にする」そうなので、ライフワークとして是非続けてほしい。

担当：石井 克佳

研究概要

研究目的は、自身の緑茶に関する知識を深めるとともに、緑茶についての知識をアメリカの高校生に知ってもらうことである。研究は、まず文献調査や聞き取り調査を行った。これによって、茶の分類や効用、栽培から製品化までの過程、茶の種類について知ることができた。次にリーフレット作りを行った。リーフレットは研究者の友人であるアメリカの高校生及びその友人を対象として作成した。文献調査や聞き取り調査で知った事柄について写真を交えながら説明する内容となった。完成後は郵送によって上記対象者へリーフレットを配布し、その後、電子メールを介して感想や意見を聞いた。「日本の文化の一つのことがわかった。」「リーフレットを持て緑茶が健康になるということについてよくわかった。」といった感想が寄せられた。

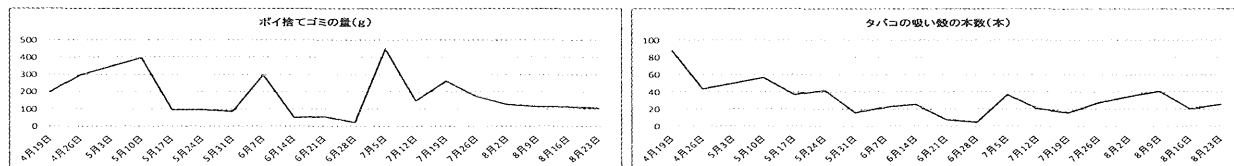
担当者から

本生徒の研究が優れている点として次の二点が挙げられる。一つは研究に対する姿勢である。本生徒に対する担当者としての助言の一つは、「〇〇バカ」になってもいいと思うような研究テーマを設定しなさいということであったが、本生徒は研究テーマを「茶」に決めてから、「茶バカ」になるべく努力を続けた。もう一つの優れている点は、自由な発想で活発な活動をした点である。茶農家を訪ねたり、アメリカの高校生にリーフレットを送るという発想と行動力は高校生ならではのことであろう。題目である「アメリカの高校生に緑茶を広める」という点において十分に成果が発揮できたとは言えないが、今後の学びに生かせるものを十分に得られたのではないだろうか。

担当：初谷 和行

研究概要

今まで行ってきたゴミ拾い活動をきっかけに、ただ拾うだけではなくゴミを捨てさせないような場所を増やしたいと思ったのが研究の動機である。研究概要は、4/19～8/23で毎週1回のゴミ拾いを行う。その間に荒廃した花壇を除草で整備し、ヒマワリを定植し、ゴミ量に変化が見られるのか経過観察するものである。明らかになったことは、ポイ捨てされるゴミは雑草の草丈が低ければ減少し、高ければ増加する。ヒマワリを定植してから2週間ほどはポイ捨てゴミは過去最低量となった。しかし、タバコの吸い殻は、ヒマワリの定植に関わらず、前後であまり変化しなかった。



担当者から

過去の経験から、研究にうまく発展させた内容であった。定期的にゴミの観察を行ったり、場所を管理している市役所に行き、取組の許可をもらう、また花壇の整備などを相談し朽ちかけていた花壇を整備してもらうなど、外部機関との連携もきちんと行っていた。花壇の整備に関わらずタバコの吸い殻に変化がなかったのは意外であったが、ゴミの量が減ったのは仮説通りの結果となった。

担当：阪本 康之

「インドネシア人看護師候補生への理想の支援の提案」

B組 曾田 希望

研究概要

もともと看護師志望であった本生徒は、本校で行っていた「アジア隣人プログラム」のメンバーとなったことを契機に、インドネシアの人々と交流を持つようになった。その中で、経済連携協定（EPA）によって来日しているインドネシア人看護師候補生のうち国家試験に合格できる者の割合が日本人に比べ極端に低いことを知り、候補生を取り巻く環境を改善する方法について研究を行った。予備調査として日本にある複数の病院でインドネシア人看護師候補生についてのアンケート調査を行うとともに、本校の「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」に基づき実際にインドネシアに渡航し、現地で研修にあたっている人々やこれから来日する人々、日本から帰国した人々などにインタビューを行った。これらの調査を経て「インドネシア人看護師候補生の認知度を高めること」と「一部の組織に負担が集中しないような支援ネットワークの整備」が必要であるとの考えに達し、その実現への試みとして校内でのゼミの開講、文化祭でのディスカッション企画などを実行に移した。

担当者から

インドネシアの人々の素晴らしさを強く感じた生徒自身が自分の考えを実現すべく精力的に活動し、多くの人々と関わり合い、多くのことを学ぶための環境を自身の力で開拓したことが本研究の特筆すべき点である。実際にどれほど認知度を上げることができたのかについての調査結果、および理想的な支援ネットワークについての具体的な提案が明確にされていない点が残念であるが、本生徒が持つ強いバイタリティを感じられる魅力的な研究である。

担当：工藤 泰三

「布の紙しばいを作る」

B組 小林 麻由美

研究概要

布絵本とエプロンシアターを融合させた、自分なりの布の紙芝居を完成させた。布絵本の場合、仕掛けなどを直接子供が触って遊ぶことができるが、文字数が少なくストーリー性に乏しい場合が多い。一方、エプロンシアターの場合は、エプロンを舞台に、様々な仕掛けでストーリーを展開できるが、子供が直接触って遊ぶことができなし。これらの利点はいかしつつ、欠点は補う形で作品を作成させた。

担当者から

布絵本と、エプロンシアターの欠点や利点をしっかりまとめたうえで、自分の作品をまとめていった作業は、自ら問題を発見し、自分の研究のターゲットをさだめ、そして自ら行動するという、まさに今、社会で求められている能力ですので、素晴らしいことだと思います。

実際に、作品の制作をはじめてみると、思いのほか時間がかかったり、思い通りに表現ができなかったりと、悩んだ時期もあったと思います。しかし、この自分なりに試行錯誤することがとても大切なことです。本人としては、最後まで完成することができず、残念な思いがあるかと思いますが、ぜひ、卒業してからも自分の作品を作り、子供たちに実際に実演してみてください。

担当：建元 喜寿

「発達障害について知る」

D組 中原 理沙子

研究概要

知的障害を伴わない発達障害が大人になってからわかるケースが増加している、という事実をもとに、発達障害についての知識を深め、その置かれた立場の理解に努めた。発達障害は先天性の脳機能障害であって性格の歪みではない。一見障害だとわかりにくいことから周囲から認識や理解を得ることが難しい。そのため、特に発達障害を抱える人の家族の立場に立った障害受容と、発達障害者の社会参入のため現在行われている支援の例についての実態調査を中心に、支援のあり方を考え、発達障害者や支援者は社会にどのような支援を求めているのかを知ることと、定型発達者が発達障害者とうまくつきあっていくためには何が大切かの二点について、高校生の立場で考えまとめた。

担当者から

発達障害の研究とその支援はまだ歴史が浅い分野であることから、目に見えぬ障害について、同じ社会で過ごしていく人として若い世代に認知の輪を広げる必要性を悟った。発達障害については、本生徒が中心に学ぶ福祉科目を通して知ったが、自身でネットを通じて学習支援体制の整備された学校を選び出し、体制づくりやカリキュラムを調査したほか、社会参入の足がかりとなる就職支援体制については、地域の支援センターへ足を運び、具体的な資料や情報を収集した。本生徒は大変文章表現力のある生徒である。論点がぶれることなく考察し研究結果をまとめた。自身の言葉で表現されているのだが、短時間の発表会では特に一般的な理想論を述べたように聞こえてしまう傾向がある。疑問、批判など、問題点を連ねて、不十分な体制に対する問題提起型の成果論文も良いのではないだろうか。

担当：後藤 卷子

「オーディオスピーカーの製作」

D組 大越 一輝

研究概要

市販されているオーディオスピーカーは数多くあり、デザインや機能、価格は千差万別である。しかし、市販のものは比較的安価で製作できる素材でできているものが多く、室内に設置すると無機質な感じがする。また、対応している音域も限られてくる。高校生が購入できる自分好みのものには限りがある。そこで、本研究では室内に設置したときにぬくもりのある木材で製作すること、自分好みの音域の出るオーディオスピーカーを製作することを目的とした。製作にあたっては市販のキットを使うのではなく、自分自身の手で設計から行うことにした。製作の経過は、オーディオスピーカーの構造について調べること、設計、必要部品を中古品店などを回って集めること、そして組み立てである。製作した結果、今の知識や力ではスピーカーの製作といっても箱の部分を作ることしかできないことがわかった。しかし、今後知識を深め、さらに自分好みのものを製作できるようになりたいと思う。

担当者から

自分好みのオーディオスピーカーを製作したいという純粋な気持ちから意欲的に行動できていたところが特に評価できる。わからないところは納得のいくまで調査し、必要な物品は休日に出かけ、何店も回って購入してくるなど、教員の指示以外でも活動できたことが満足のいく研究になった理由なのではないだろうか。

担当：熊倉 悠貴

「子供の遊びと体力・運動能力の関係について」

C組 浅見 桃子

研究概要

現代の子供は昔のように外で遊ぶ子が減り、昔に比べて体力が衰えてきている。外遊びの好きな子供を育て、体力を幼いころから向上させることが必要であると考え、この研究テーマを設定した。研究では、まず初めに、子供にとっての遊びと体力・運動能力の関係について調べた。そして実際に子供達の体力を知るために、地元の保育園に調査に行き、体力測定を実施した。約一か月半の期間をあげ、もう一度体力測定を実施した。その期間中には体力向上する遊びを取り入れてもらった。体力測定の結果は1回目と二回目の比較と、アンケートとの比較、田園との比較を行った。アンケートは子供達の普段の生活について調査した。また普段の園児の様子を知るために保育園に1週間実習に行き、どれだけ遊び（運動）をしているのかも調査した。そして全部の調査を含め、子供の体力と遊びの関係を明らかにした。

担当者から

本校の授業で「発達と保育」という授業で保育実習の時に遊びを通した体力・運動能力の向上に興味・関心を持ったことが研究の動機であった。研究を進めるうえで困難なことも多くあったが、地道な努力で解決していった。研究から実践、実践後の分析等、良くまとめられている。また、様々な場面で常に相談する姿勢や、その後、研究終了後、心配りができる姿勢が強くなった等、研究成果以外にも多くの成果があったように思う。

担当：金城 幸廣

「オセロ盤のマスをちょっと塞いだらどうなる？」

B組 伊藤 勝彦

研究概要

興味を持っていた自分好きなボードゲーム「オセロゲーム」について詳しく調べていくうち、「ミニオセロ」や「グランドオセロ」といった普通のオセロゲームと形の異なるオセロゲームがあることを知った。このオセロゲームを友人と実際に行ったところ、普通のオセロゲームと同じようなゲーム展開では勝てないということに気づいた。そこで、オセロゲームの形を変える（オセロゲームのマスを塞ぐ）とどのようなゲーム展開が起こるのかについて検討した。研究の方法として、地道にゲームごとに記録をとり、それを繰り返すことによって規則性を調べ上げる方法を取った。この研究の結果、オセロゲームのマスの塞ぎ方に応じたゲームの規則性があること、さらに、その塞ぎ方に応じてオセロゲームの戦い方が変わっていくことを発見した。

担当者から

本研究は、オセロゲームという本人が好きなものをテーマに、オセロゲームについて深く掘り下げて考えていった研究である。この研究の過程で、オセロゲームの歴史や知らなかったオセロゲームの戦術等を知ることによってオセロゲームに対する興味や関心がさらに深まる様子が見られた。また、地道に繰り返し考えながら調べ上げる結論を導くなど、丁寧に一つ一つ実験データを積み上げそのデータから規則性を導くという科学研究の基礎となる態度が見られるなど、研究に対する姿勢について好感が持てる研究だった。

担当：本弓 康之

「雑草を使ったお茶の研究～身近な植物をお茶にする～」

C組 岡田 幸太

研究概要

ふと、ドクダミはよくお茶として飲まれているので、摘んできて飲んでみたところ美味しかったため、ドクダミ以外の雑草や加工法を変えてみると、どのようなお茶ができるかと考えたところから、この研究は始まっている。文献等で雑草のことを調べることから始め、雑草を採取し、お茶にしてみることを繰り返した。加工方法も手間や器具をつかわずに、できるだけ簡単な方法を考え、16回試作を繰り返し、におい・見た目・味を・5段階評価をつけた。

担当者から

岡田君は卒業研究の時間はいつもビニールに入れたたくさんの雑草とホットプレートを持参し、調理室で地道に実験を繰り返してきた。使った道具は持参のホットプレートと調理室のレンジである。試した雑草は23種になり、それらのお茶に5段階評価をつけた。1：とてもまずい（問題外）3：標準（お湯レベル）5：おいしい（お茶以上）という観点もユニークに感じた。7回目からは加工方法を改善し、16回まで夏休みに自宅で実験を続けたことには感心した。考察で「おいしい」雑草は何科に属するか、ということは一概に言えず、また厳密には同条件下で実験をおこなったわけではないので比較は難しいとも述べている。また「お茶」の定義は？という根本的なことを考えるとまた難しいと彼も私も感じた。味の評価も今回は一人でやったこと、効用はどのように調べたらよいのか、というのも課題として残った。しかし地道に続けたことが評価できると感じている。

担当：丹羽 美由紀

「ハンドクリームの保湿について」

C組 飯山 悠香

研究概要

研究目的は、手荒れの予防や悪化防止にハンドクリームを塗るが、ハンドクリームの効果を引き出せているのかを検証することである。さらに、より効果的な使用方法を実験し、「だれでも簡単に試すことのできるハンドクリームの効率の良い使用方法」を調べる。研究方法は、手荒れの原因を調べ、手荒れの実態をインタビュー調査し、ハンドクリームの効果を調べ、実際にハンドクリームと手袋を使用した実験を行い、手肌の水分量を測定する。1ヶ月間の測定結果をまとめる。

担当者から

このことだけを書くと、印象が薄いかもしれない。実は飯山さんのご両親は美容師で、家業を手伝う本人も含めて手荒れは職業病と言えるほど日常のかつ深刻な問題なのである。家族の手荒れをどうにかしたいという思いとともに、彼女は少しずつ美容業界に足を進めている中で、「自分の進路で何か役に立つ研究はないだろうか」と考え、この研究を開始した。研究動機と目的が明確であったため、実験は順調に進んだようだ。最良の保湿効果が得られた実験は、「ハンドクリームを塗り、綿の手袋をし、さらにその上からビニールの手袋をはめて寝る」ことだった。ところが、就寝中にお父さんの手袋がとれて、データがとれないというトラブルが発生した。それもそのはずで、卒業研究のスケジュール通り、真夏にこの実験を行ったのである。その後冬も実験を続け、今は「就寝時ハンドクリーム＋手袋」の効果が如実に現れているそうである。お父さんの夏の苦労が報われたことを喜ぶとともに、今後も職業人として継続した調査と実験を続けてほしい。

担当：石井 克佳

「いい夜更かしの仕方について」

A組 藤田 裕美

研究概要

「夜更かしをできるだけ体に負担をかけずに、楽に行う方法はないのか」というテーマで、主に市販されている眠気覚まし商品の効果を実証する実験を行った。また眠気を覚ます方法として、「咀嚼」に注目しいくつかの食べ物について眠気を覚ます効果があるか実験を行った。市販されているカフェイン抽出物入りの商品は「確実に起きていられるが、寝ようと思っても自らの意志で眠ることができない」という結果となり、逆に咀嚼を利用した眠気除去については「確実に起きていられるという保障はないが、寝ようと思ったときに自らの意志で眠ることができる」ということが確認された。カフェインは何度も使用すると効果が薄れることもあり、咀嚼を利用した夜更かしの方がいいのではないかとまとめている。

担当者から

生徒からこのテーマを聞かされたとき正直なところ「このようなテーマが研究として成立するのか？」と疑問に思った。しかし、本人のやる気が強いこともあって、そのままのテーマで研究を進めることとなった。市販品の実証実験を行う場合は、体調などの条件を同じにするために相当苦労したようであった。実証実験においては生理化学的な実験はできないため、評価の仕方は主観的な体調観察のみであったが、自分なりに評価項目を設定して比較検討を行っている。科学的な観点からは評価の付け方など多くの疑問は残るが、探求心を持って研究を続けた点は十分に評価できる。

担当：深澤 孝之

「ドイツ・フランスで見た日本にも取り入れたい環境によい体験や物を伝える」

C組 竹村 絵梨奈

研究概要

研究目的は、ドイツ・フランス（以下、独・仏と表記する）における環境に配慮した取り組みを、日本の人に知ってもらい、そのような方法が日本に取り入れられるようにすることである。本研究は、本生徒が参加した第二回 ESD 国際交流プログラムが元になっており、このプログラムを通じて本生徒は、独・仏における環境に配慮した取り組みについて現地調査している。この調査によって得られた成果から、エコバンド、HALLO カード（以上、独）、ゴミ箱、ゴミ回収、電気自動車（以上、仏）などを取りあげ、日本語・英語での説明を加えた写真集を編集した。その上で、その写真集を、企業やユネスコ協会、中学校等に配布した。（本校作成段階では、中学校に配布のみ）

担当者から

本生徒の研究が優れている点として、「卒業研究」以外での学習成果を活かす形で研究を進めた点を挙げることができる。上記で述べたように本研究は本生徒が二年次の時に参加した第二回 ESD 国際プログラムが元になっている。その時に学んだことを三年次の「卒業研究」に活かすことで、あらためて自分の学びを相対化することができたであろう。さらに、外部に発信していこうとすることで、学びを自分の中だけにおさめようとしていない点も評価できる。「学び」とは自己修養であるとともによりよい社会を作るための個人的貢献のための下地作りであると担当者は考えている。本研究は結果としてその両面に関わるものになったと言えるのではないだろうか。

担当：初谷 和行

「被災地ボランティア」

B組 岡田 永江

研究概要

本研究は、参加した東日本大震災により被災した地域における3度のボランティア活動を通し、被災地におけるボランティア活動に高校生が参加しにくい、受け入れられにくいことに問題意識を持った生徒が、共にボランティア活動に参加していた多くの人々と話をしたり、街頭で高校生にインタビューを行ったりすることで、高校生が被災地でのボランティア活動に参加する上での障害となっているものを明らかにし、より多くの高校生がボランティア活動に参加できるようにする方法を提案することを目指したものである。結論としては「学校とボランティアセンターが協力してボランティアプログラムを実施する」ことを提案している。

担当者から

本研究の優れているところは、実際の自身の活動経験から問題意識を持ち、その解決に向けて自ら行動を起こしている点にある。日本財団をはじめとする各団体の人々とも自ら積極的にコンタクトを取り情報収集に努めた。また、ボランティア活動の参加記録も非常に充実したものになっており、参加経験のない人が読んでも実情をよく理解できるように記されている。最終的な提案内容が具体性に欠けるとともに、その提案に対する関係者の皆さんのフィードバックを得るところまではできなかったところが悔やまれるが、ボランティア活動をもっと広めたいという生徒本人の強い思いがにじみ出ている好研究である。

担当：工藤 泰三

「リコピンで生活習慣病予防！～毎日食べられるトマト料理の提案」

D組 猿渡 佳世

研究概要

料理に興味を持っている。話題のリコピンの効果に着目し、毎日食べるオリジナルのトマト料理を提案した。抗酸化作用があるとされるリコピンによる生活習慣の予防効果についても検証した結果を盛り込み付加価値を与えた。リコピン摂取と生活習慣病の関係については、高血圧症状のある対象者に対し1ヶ月間トマト摂取による血圧降下作用の有無を調査した。若干の降下傾向は見られたものの、効果を確証できる条件には不十分な検証であった。リコピンの効果を期待するには、トマトを継続して摂取することが重要であり、そのために毎日食べても飽きないようなトマト料理を提案することを重要視した。

担当者から

生物資源系列での学びを生かした研究成果を得るため、トマトの品種別リコピン含有量にも着目し、農業科の先生のご指導・ご協力を得ながら、生食用と加工用のトマト栽培にも同時に取り組んだ。しかし、具体的な調査方法が得られなかったため結論には結びつけられず、栽培の感想のみとなった。研究としては十分に深めた結論を導き出すまでに至らなかったが、トマトについて多角的視点から注目し検証していこうとする姿勢は素晴らしかった。

担当：後藤 卷子

「生物部の畑に生えている植物の擬人化本の作成」

A組 川端 まるみ

研究概要

擬人化とは、人間でないものを人間として性質や特徴を与える比喩の方法である。擬人化することのメリットは映像として視覚的に捉えることができるため、性質や特徴を直観的に捉えることができることにある。本研究では本校生物部が管理している畑に生えている植物を擬人化することを目的にしている。擬人化にあたってはまず自分自身が植物の知識を深めることが必要になる。植物には一見すると同じようなものだが、葉や花びらの形が違うものが多くあるためその特徴をどのように表すかに試行錯誤しているうちに、生えている植物が増えているなど苦労する場面も多くあった。最終的には全ての植物を擬人化できたわけではないが、特徴を上手に捉えた擬人化本を作成することができた。

担当者から

植物に関する知識があまりない人が見るとなるほどとうならされる擬人化ができていた。本生徒は単に絵が好き、植物が好きという気持ちではなく、他のひとにこの良さを知ってもらいたいという情熱から研究に積極的に取り組んでいた。今回は理科の教員や他の生徒に見てもらうなど作成した擬人化本を検証することは時間のゆとりがなくできなかったが、今後そういった機会がもてたならよりよい研究になるのではないだろうか。

担当：熊倉 悠貴

「筑坂の地震防災力 ～問題点から提案する新しい防災～」

C組 山田 美葵

研究概要

東日本大震災によって全国の学校における危機管理マニュアルの不備が指摘され、自らも学校で被災した際にパニックになった経験から、学校現場における防災意識の低さに関心を持った。1日の大半を過ごす学校は自分にとっての生活の場であり、安全性・防災機能の確保は極めて重要だと考え、特に地震対策に絞って今後の災害に対し、筑坂の防災がどれほど行われているのかを明らかにして、不十分な点を改善するための提案をする。同時に自らの防災意識を高めことを目的としたものである。学校の防災に関する文献や防災基本計画、罹災地の学校のマニュアルの問題点、減災方法等を調査し、罹災後3日間に必要な備蓄品と地震に強い学校防災対策を提案した。防災力の最大の効果はなにより「生徒・教職員の防災教育に力を入れること」だそうだ。

担当者から

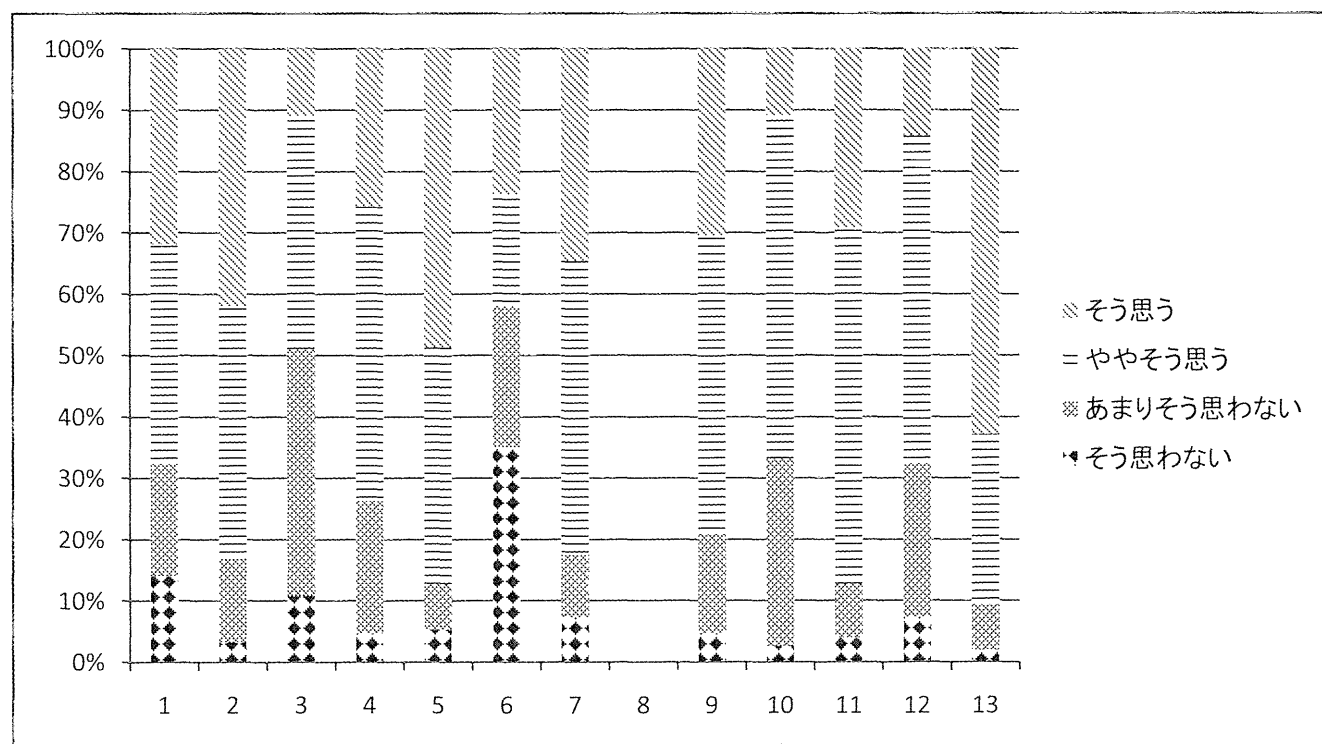
将来の夢（公共政策に携わる仕事）に繋がるテーマでもあった。早い段階から調査（校内備蓄倉庫の見学や危機管理体制を学校責任者からの聞き取り、生徒へのアンケート等）を開始するとともに、自ら校内をくまなく歩き、実情を図化し、ハザードマップを制作した。このテーマは誰も手を出さなかったものでもあり、筑坂の防災備蓄の実情を知った職員や生徒も多いはずだ。なにより真剣に取り組む姿勢に好感が持てたが、研究の中心となる夏休みから秋口にかけて、数校の大学入試と絡んでしまったため、本人が考えていた結果まで至らなかったことが残念であった。欲を言えば、費用対効果までまとめて実際に大学へ提言を行えば評価がさらに高かったと思う。

担当：吉備 豊

【資料2】アンケート集計結果

<質問項目>

- 1 高校での学習や体験にもとづいた主題（テーマ）設定ができたか
- 2 満足いく（適切な）テーマを設定することができたか
- 3 計画的に研究活動をおこなうことができたか
- 4 卒業研究の時間を有効活用したか
- 5 放課後や休日を利用して研究活動をおこなったか
- 6 校外の場所へ出かけたり校外の人に対して聞き取り活動をおこなったか
- 7 指導担当の先生のアドバイスを活用したか
- 8 論文作成のために読んだ参考図書や先行文献の冊数を答えて下さい。（省略）
- 9 人前で自分の考えを発表する力が身についたか
- 10 論文作成をとおして論理的な文章力が身についたか
- 11 自分の設定した課題の解明に向けて主体的に努力したか
- 12 満足いく卒業研究論文が作成できたか
- 13 今年度の卒業研究のテーマは履修している系列等の授業に関係なく決めることができたが、このようなテーマの選択方法について良かったと思いますか。



<記述回答>（回答結果の一部を抜粋して掲載）

- ・1つのことをとことん調べあげる大切さや楽しさを知ることができた。もっと細かく掘り下げたかったと思う。
- ・一年前の自分はその場しのぎで物事に取り組むことが多かった。しかし、研究となると一日で出来るものではないので、地道に計画を立てて実行していく大切さを学ぶことができた。
- ・1つの物事をコツコツ調べることの大切さが分かったので授業の中での調べ学習に対する姿勢が変わったと思う。
- ・調べた対象に対してますます興味がわき、それによって創作意欲も刺激された。
- ・自分の好きなことをやったので、研究してさらにそのことが身につきました。大学でも研究でやったことと同じようなことをやるので活かしていけそうです。
- ・「自分が好きなこと、したいこと」を深く考えさせられて、1年前よりも具体的に将来に向けてやりたいことが見えた気がします。
- ・自ら、好きになったことを深くまで追求し、それを沢山こなすということが出来るようになった。
- ・卒業研究を行う前は「こんな感じだろう」と人のマネを形式でも何でもやっていたように思う。自分が難しいことや思い通りにしたいこととぶつかりつつ自分だったらこうなったら良いというのがはっきりするようになったと思います。
- ・自分から物事に関心を持ち、自分で調べようと思える気になった。
- ・初めはテーマにも悩んでいたしやりたくないなー、と思っていたけれど、テーマを決めて予定を考えたりしているとだんだん楽しくなって気まずい。
- ・自主的に何かをしようとするときにはちゃんと計画をたててからやろうとする心が出来た。
- ・「研究」というものの見方が自分の中で変わった。研究が生半可の気持ちでは結果がでない。
- ・疑問に感じたら自分で調べるようになった。
- ・好きなテーマで出来るので、楽しみに感じていた。
- ・自分のやりたいことを行うのは、大切だということを学んだ。今までこういったことは分からなかった。
- ・自らの将来に疑問を感じるようになった。
- ・自分の知らないことを新しい気持ちで探っていくことの大切さを感じる事ができた。
- ・自分の好きな事だったので楽しくやることができました。今は、やってよかったと思います。
- ・「自分でやらなきゃ誰もやってくれない」というのを本当に感じた。
- ・卒研がずっと嫌だと思っていたけれど、終わってみたら人の意見とか様々な視点で物事を見たり聞いたりするようになったので今では卒研あってよかったと思う。
- ・1つ興味をもったことから関わっていることも調べていき多くのことを調べるようになった。
- ・ダメだったら今までは「テーマを変えよう」と投げ出ししていたが、次々トライしていったので「変わったなー」と思いました。
- ・自分の興味があるテーマだったからこそ、得るものが多く、アンケートを行ったことによって、いろんな人がいることを実感し、心が広く構えられるようになった。経験を自分より積んでいる人の意見をもっと積極的に聞くことは、とても自分のためになると思った。
- ・研究していくとだんだん知識が増えていつの間にか夢中になっていました。
- ・自分が好きな事、興味のある事について詳しく調べることができました。